

朝倉橋広庭宮の謎をめぐって

7世紀後半、極東アジアは風雲急を告げる。唐と新羅の連合軍により百済が滅亡。その百済復興のために、齊明天皇は遠征軍を率いて西征する。齊明7年(661)に筑紫に宮として造営されたのが「朝倉橋広庭宮」であった。しかし、齊明天皇が実際にこの宮にいたのは二か月ばかりであり、目的を果たすことなく崩御した。

1. 朝倉橋広庭宮という名称について

さて、「朝倉橋広庭宮」とはどういった名称なのだろうか。10世紀半ばに編纂された『和名類聚抄』によると朝倉のことを「上座・下座」と記しており、「座」の一文字で安佐久良と読ませていた。また、「座」は天皇の玉座という意味を含むため、朝倉宮とは齊明天皇が朝倉に御座した宮と言える。「橋」は古来より四季を通して青々とした葉を茂らせ、香りのよい実をつけることから繁栄や永続性を意味する吉祥の語句である。そして「広庭」は広大な筑紫平野を庭に見立てたのではないか。また、「庭」の文字は朝廷の「廷」と意味を同じくし、祭政を行う空間としての意味を含むことから朝廷があったことを意味しているのかもしれない。

2. 所在論①須川説

元禄7年(1694)、古賀仁右衛門著『朝倉紀聞』では旧朝倉町須川(長安寺地区)を宮跡としており、貝原益軒著『筑前国続風土記』においても「朝倉橋広庭宮址長安寺大行事社の神山下にあり」と記される。昭和以降、吉岡重美著『齊明天智両皇之御鴻業』、古賀益城著『朝倉橋広庭宮』『あさくら物語』などで須川説が主張された。

こうした経緯により昭和8・9年に名勝史蹟天然記念物調査の一環として玉泉大梁



朝倉神社近くにある朝倉橋広庭宮の碑

氏・鏡山猛氏による発掘調査、昭和48年から51年に行われた九州歴史資料館による発掘調査、朝倉町教育委員会による発掘など断続的な調査が行われた。このうち、近年行われた朝倉町教育委員会の発掘調査では「大寺」と書かれた墨書土器が検出され、9世紀ごろに寺のような役割を持つものがあったことは分かった。しかし、それよりも古い宮跡に該当するような遺構は発見されず、長安寺地区に宮跡の可能性は低いとされている。

3. 所在論②山田説



恵蘇八幡宮(朝倉市山田)

旧朝倉町山田にある恵蘇八幡宮本殿裏には齊明天皇の殯(本葬する前に遺体を仮安置すること)を行った場所と言い伝えられる円墳が残っている。また、『新古今和歌集』には天智天皇の作として「朝倉や木の丸殿に我をれば名乗りをしつつ行くは誰が子ぞ」という有名な和歌が残っている。実際、恵蘇八幡宮近くには木の丸殿と呼ばれる伝承地があり、木の丸殿を舞台にした能『綾鼓』においてもこの木の丸殿を「朝倉橋広庭宮」とし、上演されていた。

齊明天皇の殯の地とされる円墳2基は周辺から採集された遺物から古墳時代(5世紀頃)の造営であるため、齊明天皇の殯斂地とするには時代が合わないことが判明している。

4. 所在論③志波説

大分自動車道に伴う発掘調査の結果、旧杷木町志波に所在する杷木宮原遺跡、志波桑ノ本遺跡、志波岡本遺跡、旧

朝倉町大迫遺跡において大規模で規則性のある建物群が検出された。これらが朝倉宮関連の遺跡であり宮跡が志波にあったと小田和利氏、田中正日子氏が主張している。ここでは主に小田氏の論を紹介したい。

旧杷木町志波は筑紫平野南東部の最奥部に位置し、麻氏良山と高山などの険しい山々に囲まれた平野であり、南西部には筑後川が流れ、水運・防衛ともに適した地である。また、この地より5キロ東側には国防のために築造されたのではないかとされる杷木神籠石も見られ、豊の国方面へのルートとして当地が重要であったことをうかがわせる。

また、杷木宮原遺跡、志波桑ノ本遺跡、志波岡本遺跡、大迫遺跡では瓦の出土がないことから、掘立柱建物の屋根は板か萱葺きである。そして梁行2間×桁行6間の大規模な建物で、その方位が北から西に40度ほど傾き、杷木宮原遺跡と志波岡本遺跡の建物間隔は同一である。柱穴の堀方が一辺1mを越すものの、柱痕は20cm前後と貧弱で、柱穴内で柱の位置を調節できるようにしている。さらに掘方の埋土は突き固めていない簡略な作りである。建物同士の重なり合いもわずかなので、建物の存続期間は短い。これらの建物の時期は出土遺物が少ないことから断定しにくいものの、大迫遺跡の建物群は8世紀後半～9世紀前半代の火葬墓群の下層で発見され、その整地層や建物の掘方から7世紀中～後半の土器が出土している。このことから7世紀中～後半に、大規模で計画的な建物が簡略な作りで建てられているといえる。さらに、その存続期間が短いことを考えると、朝鮮半島と倭国の軍事的緊張関係の中で逼迫した状況を反映しており、これらの建物群が朝倉宮関連の施設である可能性が高い。なお、志波には「宮原」「宮下」「政所」「落(洛)中」「出殿超」「殿築」など宮関連の地名が存在し、筑後川対岸には橋の文字を冠した「橋田」の地名が残っている。旧筑後川の流れは橋田を取り込む形で流れていたとみられ、そこまで含めて朝倉宮であったと考えている。

5. 所在地論④上岩田説(小郡市)と大宰府説(太宰府市)

狭川真一氏は、『日本書紀』に記された「朝倉山」を現在の朝倉市一帯の山々であり、朝倉宮をそれが見える範囲と想定し、具体的には上岩田遺跡と考えた。しかし、現在小郡市の見解としては上岩田遺跡は役所・寺の遺跡である官衙遺跡と考えている。

赤司善彦氏は、朝倉宮が現在の太宰府市周辺に所在したという伝承(「太宰府天満宮絵図」等)を紹介し、この伝承は朝倉市内の伝承と同等に捉えるべきとし、考古学的な所見として大宰府政庁跡の初期段階が朝倉宮の造営に関係しているとする説を提示した。

6. 所在地論争から見えてくる論点

以上、朝倉市内外の所在地について主要な論を紹介した。これらの論で重要視された点は、朝倉宮の時代、つまりは7世紀後半の遺構及び遺物が検出されているか否かということであろう。しかし、出土遺物が少ないために年代の決定は慎重にならざるを得ない。さらに、杷木志波説の中では同地域で検出された掘立柱建物群を「朝倉宮の関連施設」と位置付けているが、それでは「朝倉宮の本体」とは一体どこに存在し、どのような姿だったのだろうか。齊明天皇が西征した熟田津の石湯行宮には、7世紀後半の官衙遺跡(久米官衙遺跡)が見つかり、回廊や寺院跡などが発見されている。このような例を参考にしながら、古代史、考古学両面から丁寧に謎を解いていけば、茫洋としていた朝倉宮は少しずつ姿を見せてくるのではないだろうか。

(当館副館長 遠藤啓介)

参考・引用文献(五十音順)

- 赤司善彦 2010 「筑紫の古代山城と大宰府の成立について—朝倉橋広庭宮の記憶」 古代学協会『古代文化第61巻 第4号』
- 赤司善彦 2010 「朝倉橋広庭宮推定地の伝承について」九州国立博物館『東風西声 九州国立博物館紀要5』
- 朝倉町教育委員会 2002 『朝倉町文化財報告書第10集』
- 伊崎俊秋 1996 「朝倉橋広庭宮をめぐる世界—見学の手引きをかねて—」 甘木歴史資料館『温故第24号』
- 小田和利 1992 「福岡県朝倉町大迫遺跡と朝倉橋広庭宮について」 有明文化を考える会編『北部九州の古代史』名著出版
- 小田和利 1993 「朝倉橋広庭宮の再検討—杷木町志波地区の大規模建物跡群とその歴史的意義づけ—」九州歴史資料館『九州歴史資料館研究論集18』
- 小田和利 2010 「朝倉橋広庭宮と観世音寺—宮の所在地についての再検討—」九州歴史資料館『九州歴史資料館研究論集35』
- 九州歴史資料館 1974 『朝倉橋広庭宮跡伝承地第1次発掘調査報告』
- 九州歴史資料館 1975 『朝倉橋広庭宮跡伝承地第2次発掘調査報告』
- 九州歴史資料館 1976 『朝倉橋広庭宮跡伝承地第3次発掘調査報告』
- 清原倫子 2009 「朝倉橋広庭宮と古代浮羽の歴史的位置」長洋一監修・柴田博子編『日本古代の思想と筑紫』 権歌書房
- 酒井芳司 2014 「朝倉橋広庭宮名号考」吉村武彦編『日本古代の国家と王権・社会』 権書房
- 狭川真一 1999 「朝倉橋広庭宮と筑紫」古代学協会『古代文化第51巻第5号』
- 田中正日子 1987 「筑後古代史の展開(中)」田主丸郷土会『郷土史研究創刊号』
- 田中正日子 2008 「筑紫大宰とその支配(その1～2)」歴史と自然をまもる会『ふるさとの自然と歴史321～322』
- 玉泉大梁・鏡山猛 1934 「朝倉橋広庭宮遺址(第1回報告)」『福岡史跡名勝天然記念物調査報告書』第9集
- 玉泉大梁・鏡山猛 1935 「朝倉橋広庭宮遺址(第2回報告)」『福岡史跡名勝天然記念物調査報告書』第10集
- 玉泉大梁・鏡山猛 1937 「朝倉橋広庭宮遺址(第3回報告)」『福岡史跡名勝天然記念物調査報告書』第12集
- 福岡県教育委員会 1982～1999 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告1～56』



Amagi Historical Museum

◆発行日：平成29年6月18日

甘木歴史資料館

◆住所：〒838-0068 福岡県朝倉市甘木216-2

◆TEL/FAX：0946-22-7515

◆<http://www.city.asakura.lg.jp/ama-reki/>